

陸連時報 三

2019
平成31年

4 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

2019年シーズンの抱負(強化委員会).....	166
オーフス2019世界クロスカントリー選手権大会 日本代表選手.....	169
第23回アジア陸上競技選手権大会 日本代表選手.....	170
2018-2019ダイヤモンドアスリート第2回、第3回リーダーシッププログラム報告.....	171
(ダイヤモンドアスリートコーディネーター 田原陽介)	
国際陸上競技連盟(IAAF)技術委員会報告(陸連事務局国際部長 関幸生(IAAF技術委員会委員))	
.....	173
2018年度日本陸上競技連盟U16ジュニアブロック研修合宿 報告(普及育成委員会 東川安雄).....	175
第24回JAAFコーチング・クリニック報告(普及育成委員会 指導者育成部 沼澤秀雄).....	177
第25回JAAFコーチング・クリニック報告(普及育成委員会 指導者育成部 原悦子).....	178
大会観戦ガイド.....	179
陸協NEWS.....	180
事務局からのお知らせ.....	182

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

2019年シーズンの抱負

強化委員会

■強化委員長 麻場 一徳

2019年シーズンは、東京オリンピックの前年であり、4年サイクルの仕上げの時期となる。最重要国際大会として世界選手権ドーハ大会が9月から10月にかけて開催されるとともに、それにつながる大会としてアジア選手権が4月にドーハで、世界リレー大会が5月に横浜で開催される。また、東京オリンピックの出場者が決まるMGC（マラソングランドチャンピオンシップ）ファイナルレースが9月に開催される。いずれにしても、2019年シーズンの取り組み、成果が東京オリンピックに直結することに間違いない。

昨年行われたアジア競技大会では、ゴールドメダルターゲットである男子短距離（男子200m、男子4×100mリレー）や男子50km競歩で金メダルを獲得し、さらには男子棒高跳や男子マラソンでも金メダルを獲得するなど、オリンピックに向けて着実に歩みを進めていることを確認できた。その一方で、他のカテゴリーでは、苦戦を強いられたものもあり課題が明らかとなった。2019年シーズンは、順調に強化が進んでいる種目の更なる推進と、課題が明確となった種目の戦略見直しを図った上で強化を進めていきたい。

2020東京オリンピックに向けた、2019年シーズンの強化委員会活動方針は以下のとおりである。

1. 東京2020オリンピックに向けた方針（目標）
 - 1) メダル・入賞を一つでも多く
 - 2) 舞台に立つ者（出場者）を一人でも多く
2. 2019年シーズンの目標
 - 1) ドーハ2019世界選手権での成功（各カテゴリーが設定した目標の達成）
 - 2) 東京オリンピックに向けたワールドランキング対策
 - 3) 東京オリンピック及びそれ以降につながる戦略的活動の実行
3. 具体的戦略
 - 1) 3本柱（男子リレー、男子競歩、男女マラソン）を中心としたメダル獲得プロセスの強化
 - ・特に暑熱対策等、医科学的バックグラウンドの確立と選手の個性への適用
 - 2) 個人及び特別プロジェクトでの具体的強化プロセス
 - ・強化競技者、及び強化対象競技者に対するオリンピックに向けた強化サポートの充実
 - ・女子リレーの特別対策プロジェクトの推進
 - 3) IAAFワールドランキング制の研究と利用、現場への周知徹底
 - ・東京オリンピックにつながる戦略的な選手強

化・海外派遣

- ・海外転戦のための拠点機能の整備
 - ・国内競技会カレンダーの整備とステータス向上への取り組み
- 4) 強化プロセスに直結する選考方法の立案
 - ・MGCのように選考方法が強化と連動する仕組みづくりと目標の明確化
 - 5) 競技者育成指針（JADM：JAAF Athlete Development Model）に基づくU20、U18の強化・育成施策の展開
 - ・2020年以降に活躍が期待されるダイヤモンドアスリートやU20オリンピック育成競技者を中心とした次世代を担う競技者の強化・育成を図るとともに、U20、U18カテゴリーの競技会のあり方、育成のプロセスを整備する。
 - 6) アンチ・ドーピングの強化
 - ・陸上競技、更にはスポーツの高潔さを失わないためにも、アンチ・ドーピングの理念を十分に理解したクリーンなアスリートを育成することは必須であり、陸連医事委員会のみならず日本実業団連合、日本学連、高体連等とも連携したアンチ・ドーピングの取り組みを強化する。

これらの活動を進めていく上で、陸上競技関係者やファンの方々にとどまらず、多くの国民の皆さんに応援していただけるよう、積極的な情報発信や企画等の取り組みを実践していきたい。

■T&F担当ディレクター 山崎一彦

アジア選手権の重要度が増す

2019年シーズンの主な国際競技会は、世界選手権（ドーハ）、アジア選手権（ドーハ）、世界リレー選手権（横浜）である。19年より国際競技会カレンダーは国際陸連の戦略上、大きく変化し、エリアごとの競技会スケジュールの整理が行われた。そのためアジアエリアの国際競技会は4月から5月に配置されたことや、カタール・ドーハの気候的な問題もありアジア選手権は、4月中旬となった背景がある。国際競技会の4月開催は近年では見当たらないスケジュールであるが、アジア選手権は2020年東京オリンピック出場のための、ワールドランキングポイントとして100%加算される方向性を示しており、重要競技会として位置づけられた。すでに派遣選手は決定しているが、選考方法に関しては、ワールドランキングを意識した方針を打ち出し、競技者はより国際競技会や重要競技会での安定感が求められることとなった。そのため、高ポイントとなるアジア選手権では3位

以内に入ってアドバンテージをつけたいところである。

世界選手権における標準記録制の影響

世界選手権は、当初ワールドランキングでの出場資格を定める方向性であったが、昨年11月に従来の標準記録制と取ることとなった。この標準記録は、各種目のターゲットナンバー（参加人数）が明確に示され、それ以上の参加人数にならないように考えであるため、従来の世界選手権標準記録よりも若干高めに設定された。このことから、厳しい状況が続く事となるが、逆に戦える競技者の明確性を帯びてきたことから、強化の方向性も明確になってきた。しかしながら、東京オリンピックを迎えるにあたって、多くの競技者が参加する事も目標にしていることを理事会での方針で打ち出されたことから、ダブルスタンダードで強化の方向性も考えていかなければならない。

東京五輪へ多数出場させる

「東京オリンピックに参加する」と行った意味では、女子リレープロジェクトが立ち上げられた。女子競技者の活躍を世界の舞台で定着させるためには、陸連、コーチ、競技者が一つの方向へ向かって進むことが重要であることから、強化されたい人の公募制、強化計画の事前による方向性の明示を行い、個人の到達ラインおよびリレーの技術を磨くための強化を進めている。5月に横浜で開催される世界リレー選手権での日本記録、入賞または10位以内に食い込み、世界選手権の出場権獲得から東京オリンピックに結びつけたい考えである。

戸邊直人の活躍から

一つも落とすことのできない戦いをしている競技者もいる中で、勝負のできる種目も多く見えてきた。まず、第一に挙げられるのは男子走高跳の戸邊直人である。2月に2m35の日本記録を更新し、日本人では初めて、IAAF室内ワールドツアーの種目別ツアー優勝を果たした。戸邊は5年以上前から欧州競技会に積極的参戦し、海外競技会でのノウハウと技術を定着させてきた。多くの日本人競技者は、国内競技会での記録狙いの中、戸邊は低迷期もあったが、信念を曲げずに挑戦し続けた。これは現強化の望む理想形であり、他の競技者も追随して欲しいところである。その他の室内競技会では、男子棒高跳の山本聖途が1月に5m71の好記録で世界線選手権の標準記録を早々越えた。このように本年はシーズン開始が早いことから競技者も早めの出だしであるが、多くの朗報も聴けている。

日本で初の開催となる世界リレー選手権では、男子400mリレーに金メダルの期待がかかる。チーム戦略としては37秒台を早めに2度出して、一気に東京オリンピックの出場圏内を手中にし、オリンピックまでは個人強化をして複数名の9秒台スプリンター、19秒台スプリンターを出していきたい。

世界選手権へ向けて

世界選手権においては10月開催と、変則的な競技会

スケジュールとなるが、日本人にとっては、秋シーズンの競技会に慣れている事もあり、海外競技者よりも心理的にもトレーニング周期としても影響を最小限にとどめられるかと考えられる。世界選手権での戦績や戦況が来年の東京オリンピックに大きく影響することから、出場するというところから、トラックは準決勝でベスト12、フィールドは決勝進出をして、世界で戦う真剣勝負の中に競技者自身が経験しておきたいところである。私たち強化としては、その環境が作れるように意識づけと雰囲気作りをしていきたい。

■長距離・マラソン強化ディレクター 河野 匡

2020東京オリンピック・パラリンピックまで500日余りとなった。月日が経つのは早いもので強化も方針、方向性といった大きな枠組みから、実際に戦うメンバーがどのように具体的に準備していくかを検討していく段階になってきた。優先順位を明確にし、万全の準備をしなければならぬ。

長距離・マラソンの2019年4月からオリンピックまでのベンチマークは以下の通りである。

<長距離>

- ・ドーハアジア選手権（4/21～4/24）
- ・2019日本グランプリ各大会
- ・2019ペイトンジョーダン招待10000m（5/2：サンフランシスコ）
- ・日本選手権10000m（5/19：大阪）
- ・日本選手権5000m（6/27～6/30：福岡）
- ・ホクレンディスタンス及びヨーロッパ遠征
- ・ドーハ世界陸上（9/27～10/6）
- ・各記録会及び※国際室内競技会
- ・2020日本グランプリ各大会
- ・2020ペイトンジョーダン招待10000m（未定：サンフランシスコ）
- ・2020日本選手権10000m（未定）→代表内定
- ・2020日本選手権5000m（6/25～6/28：大阪）→代表決定及び追加代表

<マラソン>

- ・4/30MGCシリーズ終了→ファイナルチャレンジ記録の設定
 - ・ドーハ世界陸上選手選考（5月末）
 - ・MGCレース（9/15：東京）→マラソン代表2名内定
 - ・オリンピック代表選手キックオフ合宿（9/25～10/1：未定）
 - ・ドーハ世界陸上（9/27～10/6）→暑熱対策シミュレーション
 - ・オリンピック代表ファイナルチャレンジレース（2019年12月～2020年3月）
 - ・オリンピック代表決定
- 選考を左右する主要大会とそれに伴う関連事項を時系

列に列記したが、長距離は2020東京オリンピックでの戦い方を重要視し、かつ2019ドーハ世界陸上の標準記録を考慮しながらワールドランキング制度に対応していく必要がある。記録を意識しつつカテゴリーの高いレースでの順位を勝ち取らなければならないので、専任コーチ、選手とコミュニケーションを取って戦略的なスケジュール調整を図りたい。マラソンについてはMGCシリーズが4月30日に終了し、出場選手が確定する。その後すぐにMGCファイナルチャレンジでオリンピック代表になるための記録を設定する。代表決定のプロセスが明確になった分、その指標となる記録の設定は根拠ある数字でなければならない。関係スタッフで熟考したい。

9月15日MGCレースは代表2名が内定し補欠を含めた代表の優先順位も決定する。大きな注目を集め後世に語り継がれる大会になるだろうが、我々は結果を冷静に受け止め、メダル獲得に向けての準備を着実に進めたい。

各カテゴリーにおける現状と2019年度の展望は、

§ 男子長距離

現状ドーハ世界陸上参加標準記録に到達している選手はゼロである。ロンドン世界陸上、ジャカルタアジア大会の出場もゼロであった。トラックで活躍していた多くの選手がマラソンに移行し顔ぶれがかなり変わった。その中でも特に期待するのが遠藤日向（住友電工）である。アメリカのクラブチームでトレーニングを積み、その成果が実りつつある。2月に「2019 David Hemery Valentine Invitational」において大迫傑（Nike）が持つ5000m室内日本記録を更新する13分27秒81をマークし屋外での飛躍に期待がかかる。それに触発されるように荒井七海（Honda）が1マイルを3分56秒60で優勝し室内日本記録を更新した。これまで室内への取り組みが皆無だった日本長距離界にとって新たな方向性を見出す契機になると考えている。この2年間スピード養成に特化した強化策を展開してきたが、2019年度は東京オリンピックに繋がる成果を出したい。ドーハ世界陸上参加標準記録（5000m13分22秒50、10000m27分40秒00）を複数名突破者が出ることを期待している。

§ 女子長距離

5000mで田中希実（ND28AC）、岡本春美（三井住友海上）、10000mで山ノ内みなみ（京セラ）、岡本春美（三井住友海上）、鍋島莉奈（JP日本郵政G）、矢野栞（キャノンAC九州）、新谷仁美（Nike TOKYO TC）、堀優花（パナソニック）がすでに世界陸上の標準記録に到達している。他にも標準記録に到達しそうな選手は多数いるので、両種目とも世界陸上、オリンピックでフルエントリーできるのは間違いない状況である。但し入賞、メダルを狙うとなるとアフリカ勢、欧米勢はもうワンランク上のレベルである。ラストスパート勝負では現状外国勢には劣るので前半からハイペースで展開し勝機を見出すしかない。その意味で新谷の復活は頼もしい限りであ

る。彼女の積極的な走りに周りが触発されてレベルアップすることを期待したい。2019年は5000m14分台、10000m30分台、2020年14分50秒、30分40秒以内が入賞争いするために必要である。激しい代表争いの中で各選手の成長に期待したい。

§ 男女マラソン

2月末現在でMGCファイナリストが男子は24名。東京マラソン、びわ湖毎日マラソン、海外マラソンを残しているのが30名以上になるのは確実だと思われる。大迫の日本記録2時間5分50秒はさらに更新されているだろうか。サブ10選手は何名になっているか。

女子は9名だが、東京マラソン、名古屋ウィメンズマラソン、海外マラソンで15名前後になっていると予想している。

期待は膨らむがほとんどの選手は9月15日MGCレースを意識しているだろう。誰が代表の座を勝ち取るか興味深いところだが、とにかく悔いのない準備をして100%実力を発揮してもらいたい。またファイナルチャレンジでは代表に懸ける思いをすべて出し切って貰いたい。

我々は選手、専任コーチの頑張りにも万全の準備で応える覚悟である。悲願の「メダル獲得」に向けて、やるべき事を粛々と実行する1年にしたい。

【MGCファイナリスト】

男子

MGCシリーズ	所属	所属
2017-2018	村澤 明伸	日清食品グループ
	大迫 傑	Nike
	上門 大祐	大塚製薬
	竹ノ内佳樹	NTT
	園田 隼	黒崎播磨
	設楽 悠太	Honda
	井上 大仁	MHPS
	木滑 良	MHPS
	宮脇 千博	トヨタ自動車
	山本 憲二	マツダ
	佐藤 悠基	日清食品グループ
	中村 匠吾	富士通
	川内 優輝	埼玉県庁
	岡本 直己	中国電力
2018-2019	谷川 智浩	コニカミノルタ
	大塚 祥平	九電工
	中本健太郎	安川電機
	藤本 拓	トヨタ自動車
	服部 勇馬	トヨタ自動車
	山岸 宏貴	GMOアスリート
	福田 穰	西鉄
	二岡 康平	中電工
	橋本 峻	GMOアスリート
	岩田 勇治	MHPS
	堀尾 謙介	中央大学
今井 正人	トヨタ自動車九州	
藤川 拓也	中国電力	
神野 大地	セルソース	

女子

MGCシリーズ	氏名	所属
2017-2018	前田 穂南	天満屋
	松田 瑞生	ダイハツ
	安藤 友香	スズキ浜松AC
	関根 花観	日本郵政G
	岩出 玲亜	アンダーアーマー
2018-2019	野上 恵子	十八銀行
	鈴木亜由子	日本郵政G
	小原 怜	天満屋
	中野 円花	ノーリツ

オーフス2019世界クロスカントリー選手権大会 日本代表選手

本年3月30日（土）にオーフス（デンマーク）で開催される、オーフス2019世界クロスカントリー選手権大会に派遣する日本代表選手が決定しましたのでお知らせします。

【男子12名 女子10名】

種目	氏名	陸協	所属	生年月日	日本選手権順位
シニア男子10km (6名)	坂東 悠汰	兵庫県	法政大学	1996/11/21	1
	田村 友佑	福岡県	黒崎播磨	1998/12/23	3
	中谷 雄飛	長野県	早稲田大学	1999/06/11	4
	小松 陽平	北海道	東海大学	1997/11/02	5
	山口 浩勢	愛知県	愛三工業	1991/08/19	7
	西山 雄介	愛知県	トヨタ自動車	1996/11/07	8
シニア女子10km (4名)	田中 希実	兵庫県	ND28AC	1999/09/04	1
	上田 雪菜	奈良県	筑波大学	1998/02/07	6
	加世田梨花	千葉県	名城大学	1999/03/02	7
	藪田 裕衣	徳島県	大塚製薬	1996/03/04	8
U20男子8km (6名)	葛西 潤	大阪府	関西創価高校	2000/10/24	1
	佐藤 一世	千葉県	八千代松陰高校	2001/07/21	2
	井川 龍人	熊本県	九州学院高校	2000/09/05	3
	白鳥 哲汰	埼玉県	埼玉栄高校	2001/08/24	4
	鈴木 芽吹	長野県	佐久長聖高校	2001/06/03	5
	中西 大翔	石川県	金沢龍谷高校	2000/05/27	6
U20女子6km (6名)	廣中璃梨佳	長崎県	長崎商業高校	2000/11/24	1
	風間 歩佳	千葉県	成田高校	2001/09/14	2
	小坂井智絵	千葉県	成田高校	2003/01/22	3
	酒井 美玖	福岡県	北九州市立高校	2002/10/05	4
	大西ひかり	兵庫県	須磨学園高校	2000/04/26	5
	土井 葉月	兵庫県	須磨学園高校	2002/12/17	6

第23回アジア陸上競技選手権大会 日本代表選手

本年4月21日(日)から4月24日(水)までドーハ(カタール)で開催される、第23回アジア陸上競技選手権大会に派遣する日本代表選手が決定しましたのでお知らせします。

[男子 36名]

2019年2月13日発表分

Event/種目	氏名	陸協	所属	生年月日	PB	SB
100m	山縣 亮太	東京	セイコー	1992/6/10	10.00	10.00
100m	桐生 祥秀	東京	日本生命	1995/12/15	9.98	10.10
200m	小池 祐貴	大阪	住友電工	1995/05/13	20.23	20.23
200m	飯塚 翔太	静岡	ミズノ	1991/06/25	20.11	20.34
400m	ウォルシュジュリアン	埼玉	東洋大学	1996/9/18	45.35	45.63
800m	川元 奨	静岡	スズキ浜松AC	1993/03/01	1.45.75	1.47.16
800m	村島 匠	福井	福井県スポーツ協会	1995/10/01	1.47.01	1.47.01
1500m	館澤 亨次	神奈川	東海大学	1997/5/16	3.40.49	3.40.49
1500m	田母神一喜	福島	中央大学	1998/2/12	3.40.66	3.40.66
5000m	服部 弾馬	愛知	トイエック	1995/02/07	13.34.64	13.42.10
5000m	松枝 博輝	千葉	富士通	1993/05/20	13.28.61	13.39.83
10000m	鏑坂 哲哉	宮崎	旭化成	1990/03/20	27.29.74	27.55.85
10000m	阿部 弘輝	福島	明治大学	1997/11/19	27.56.45	27.56.45
110mH	高山 峻野	神奈川	ゼンリン	1994/9/3	13.44	13.45
110mH	金井 大旺	福井	ミズノ	1995/9/28	13.36	13.36
400mH	安部 孝駿	岡山	デサントTC	1991/11/12	48.68	48.68
400mH	岸本 鷹幸	東京	富士通	1990/5/6	48.41	49.30
3000mSC	塩尻 和也	群馬	順天堂大学	1996/11/8	8.29.14	8.29.14
3000mSC	山口 浩勢	馬場	愛三工業	1991/8/19	8.30.98	8.30.98
走高跳	戸邊 直人	茨城	つくばTP	1992/3/31	2.35(i)	2.35(i)
走高跳	衛藤 昂	三重	味の素AGF	1991/2/5	2.30	2.28
棒高跳	山本 聖途	愛知	トヨタ自動車	1992/3/11	5.75	5.70
棒高跳	江島 雅紀	神奈川	日本大学	1999/3/6	5.65	5.55
走幅跳	橋岡 優輝	東京	日本大学	1999/01/23	8.09	8.09
走幅跳	城山正太郎	北海道	ゼンリン	1995/3/6	8.01	7.98
三段跳	山下 航平	東京	ANA	1994/9/6	16.85	16.59
三段跳	山本 凌雅	東京	JAL	1995/7/14	16.87	16.59
砲丸投	中村 大地	茨城	ミズノ	1993/1/15	18.85	18.85
円盤投	湯上 剛輝	愛知	トヨタ自動車	1993/4/14	62.16	62.16
円盤投	米沢茂友樹	東京	オリコ	1993/1/19	58.53	56.93
ハンマー投	墨 訓熙	愛知	小林クリエイト	1994/2/27	70.63	70.63
ハンマー投	木村 友大	京都	九州共立大学	1996/10/19	70.06	69.58
やり投	新井 涼平	静岡	スズキ浜松AC	1991/6/23	86.83	80.83
やり投	小南 拓人	茨城	筑波銀行	1995/7/26	80.18	80.18
十種競技	右代 啓祐	東京	国士舘クラブ	1986/07/24	8308	7948
十種競技	中村 明彦	静岡	スズキ浜松AC	1990/10/23	8180	7849

[女子 31名]

Event/種目	氏名	陸協	所属	生年月日	PB	SB
100m	福島 千里	東京	セイコー	1988/06/27	11.21	11.42
800m	北村 夢	広島	エディオン	1995/12/23	2.00.92	2.02.54
800m	塩見 綾乃	京都	立命館大学	1999/11/26	2.02.57	2.02.73
1500m	卜部 蘭	東京	NTTC	1995/6/16	4.16.36	4.16.36
1500m	陣内 綾子	福岡	九電工	1987/1/21	4.10.08	4.16.80
5000m	田中 希実	兵庫	ND 28AC	1999/9/4	15.15.80	15.15.80
5000m	高松 智美 ムセンビ	大阪	名城大学	2000/2/23	15.26.76	15.26.76
10000m	堀 優花	神奈川	パナソニック	1996/6/13	31.48.93	31.48.93
10000m	新谷 仁美	東京	NTTC	1988/2/26	30.56.70	31.32.50
100mH	木村 文子	広島	エディオン	1988/6/11	13.03	13.13
100mH	青木 益未	宮城	七十七銀行	1994/4/16	13.17	13.17
400mH	宇都宮 絵莉	兵庫	長谷川体育施設	1993/4/11	56.84	56.84
400mH	青木 沙弥佳	福島	東邦銀行	1986/12/15	55.94	57.55
3000mSC	石澤 ゆかり	広島	エディオン	1988/4/16	9.53.22	9.53.22
3000mSC	藪田 裕衣	徳島	大塚製薬	1996/3/4	9.58.89	9.58.89
走高跳	仲野 春花	福岡	早稲田大学	1996/4/11	1.83	1.82
走高跳	津田 シェリアイ	大阪	東大阪大学	1996/9/9	1.83	1.83
棒高跳	南部 珠璃	滋賀	中央大学	1998/6/9	4.09	4.09
棒高跳	田中 伶奈	香川	観音寺第一高校	2000/6/29	4.12	4.12
走幅跳	高良 彩花	兵庫	園田学園高校	2001/3/22	6.44	6.44
走幅跳	中野 瞳	茨城	和食山口	1990/11/23	6.44	6.43
三段跳	宮坂 楓	神奈川	ニッパツ	1992/12/12	13.52	13.15
砲丸投	郡 菜々佳	大阪	九州共立大学	1997/05/02	16.57	16.11
円盤投	太田 亜矢	福岡	福岡大学クラブ	1995/4/13	54.74	54.74
砲丸投	齋藤 真希	岡山	福岡工業高校	2001/2/13	16.47	16.00
円盤投	勝山 眸美	東京	オリコ	1994/05/21	52.38	52.38
ハンマー投	渡邊 茜	福岡	丸和運輸機関	1991/8/13	65.32	65.32
やり投	齊藤 真理菜	静岡	スズキ浜松AC	1995/10/15	66.79	65.24
やり投	宮下 梨沙	大阪	大体大.T.C	1984/4/26	62.37	60.79
七種競技	山崎 有紀	静岡	スズキ浜松AC	1995/6/6	60.86	60.71
七種競技	ヘンピル 恵	京都	中央大学	1996/5/23	5873	5873
七種競技					5907	5766

※男子4×400mR、女子4×100mR・4×400mRおよびそれに関わる個人種目については3月下旬ごろ選考、4月上旬発表予定。

2018-2019ダイヤモンドアスリート第2回、第3回リーダーシッププログラム報告

ダイヤモンドアスリートコーディネーター 田原陽介（環太平洋大学）

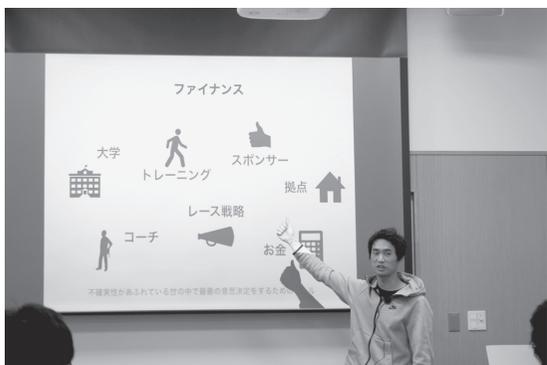
2020年東京オリンピックと、その後の国際大会での活躍が大いに期待できる次世代の競技者を強化育成する「ダイヤモンドアスリート」制度では、選出された競技者に様々なプログラムを提供し中長期的なエリートを育成します。本稿では、味の素ナショナルトレーニングセンターで実施された「リーダーシッププログラム」の第2回、第3回の模様を報告いたします。

第2回リーダーシッププログラム（平成31年1月11日）

【講義：西谷尚徳（立正大学法学部准教授）】

プロ野球選手から研究職（大学教員）に就くという珍しい経歴を持った西谷さんより、「君はプロ（professional）ですか？」というテーマで講義がなされた。「どういうことをプロフェッショナルと呼ぶのか」「トップアスリートとして高みを目指していくために、何を大切にすればよいか、具体的にどんな取り組みを進めていけばよいか」について話が展開され、特に大切な点は以下であった。

・アスリートして実績を残していくには「受信（input）・思考（think）・発信（output）」が必要な方法となる。そのプロセスの中で根拠（理由づけ）が大切で、体現できたことに対して、きちんと自分で根拠づけしていく能力」が求められる。



- ・自分の力量やパフォーマンス、モチベーションなどを基準化し、「陸上偏差値」を作ってみる。それを作ることによって、自分の力量、他者とのポジション、自分に必要なものがみえてくる。
- ・衰退していくにも理由が存在する。常に自分に負の要素が生じていないか、常に自身をトップマネジメントできるように心がけてほしい。

【振り返りワーク】

- ①講義を振り返り、自分の競技力向上にすぐ生かせそうだったことをシートに記入
- ②ダイヤモンドアスリート修了生と10分間のディスカッションを行い、学びを深める
- ③②のディスカッション内容を2分間の口頭発表できるようにまとめ発表する。

【発信チャレンジ】

ダイヤモンドアスリートの発信力強化を目的に、実践型ワークが新たに組み込まれた。今回は「各界の著名人1000人の前でアスリート代表として急にスピーチを頼まれた」という設定のもと、5分間で内容を考えたのち1分間のスピーチに挑戦した。

【アスリート委員会対話：横田真人（日本陸連アスリート委員）】

横田さんは800mの日本記録を樹立し、ロンドンオリンピックにも出場したオリンピックの立場と、米国公認会計士という立場から「アスリートとお金」というテーマで講義が行われた。

まず、金融や経済の世界で用いられる概念や方法は、「自分の競技に落とし込むことができる」として、「会計」「ファイナンス」「リスク」「リターン」「オプション」「分散化」「レバレッジ」等の用語について、意味を説明しつつ、その考え方が陸上競技のどの場面で活用できるのかをわかりやすく説明した。講義全体でダイヤモンドアスリートに対して以下のような提起を行った。



- ・アスリートの持っておりリソース（資源：時間、お金、人間関係）を、なるべく分散して管理することが大切である。特に、陸上競技にだけに費やすのではなく、別のことにも興味や関心を広げ、取り組んでほしい。
- ・信用（レバレッジ）は「約束という借金」という見方もでき、それを活用して、大きなことのために行動してほしい。一方で、信用される人間になるためにはどうすればよいかも同時に考えていく必要がある。

第3回リーダーシッププログラム(平成31年1月14日)

【講義：松田悠介（Crimson Education Japan代表取締役社長）】

松田悠介さんは、大学卒業後に体育教員となったが、その後教育委員会で働いたのち、ハーバード大の教育大学院で教育リーダーシップを学び、現在は国内の教育問題に取り組むTeach For Japanを7年間経営してきました。自身を「誇れるものは何もなかったところからスタートしている」とし、キャリアを振り返るなかで、そこで気づいたことや学んだことを紹介していった。以下のような点を特に強調してメッセージを送った。

- ・自分は2回の留学で、人生が変わっている。ぜひとも「海外でチャレンジする」ということをやって欲しい。
- ・「5年後、10年後、どうありたいか」という志を大切にしてほしい。「夢や目標を語るのは恥ずかしい」ではなく、夢や目標を語ることに「いいね」と言ってくれる仲間を探して、どんどん語って、自分の言葉にしていってほしい。
- ・弱みにフォーカスするのではなく、圧倒的な強みは何かを考え、それを伸ばすことにエネルギーを注いでいった方が効率よく、効果も高い。
- ・自身のキャリアやアスリートとしての考え方を、グローバルな文脈で考えてほしい。

【振り返りワーク】

- ・2分間各自の意見をまとめ「松田さんの話で印象深かったこと」「そこで自分が興味をもった理由」を述べる。
- ・自分で考えた意見のうち「印象深かった事柄に付随し



た質問を1つ松田さんに行く」ことを全員が行い、講演者とディスカッションを行い、さらに知識を深めた。

【発信チャレンジ】

アスリートがいつ遭遇してもおかしくないスピーチシチュエーションを設定し、その場で内容を検討し、実際にスピーチを行う実践型のワークが行われた。今回のテーマは「アンチドーピング活動を広げていく重要性について個人的な考え方をテレビの取材で答える」という場が設定され、5分間で修了生からもアドバイスを受けながら、コメントを考え実践した。

【アスリート委員会対話：加納由理（日本陸連アスリート委員）】

長距離を中心に活躍された加納由理さんから、アスリート委員会を代表してダイヤモンドアスリートへ競技面やその後のキャリアについてのアドバイスが送られた。現役引退後、自身の経験を生かした仕事についている加納さんは、「今だから思う、現役時代にやっておけばよかったこと」として、「外部への発信を積極的に行うこと」「違う分野、違う競技の人とかかわる」「コミュニケーション能力を高める」「タイムマネジメントを上手に行う」「考える習慣をつける」「影響力を持つ」「引退後もつながり続ける人脈、ファンをつくる」の7つの項目を提示し、以下のようなエールを送った。

- ・引退してからいろいろな活動を行ってきたが、現役の時から引退時を考えて活動すれば、応援してくれる人がきっとできてくれるので、外部への発信や人のつながりを大切にしてほしい。
- ・世界選手権やオリンピックを目指すことを重要視しながら、引退をした後に「アスリートとしてやってきてよかった」と思える人生を送ってほしい。



国際陸上競技連盟 (IAAF) 技術委員会報告

陸連事務局国際担当部長 関幸生 (IAAF 技術委員会委員)

2019年2月3日(土)～4日(日)、IAAF本部があるモノコでIAAF技術委員会会議が開催された。

本年は、9月にIAAF総会がカタールのドーハで開催されるため、加盟団体(各国陸連)から事前に寄せられた競技規則改正提案の検討に今回は、多くの時間を割くことになった。なお4年前の総会までは、規則改正は、IAAF理事会承認を経て、総会で決定という手順を取っていたが、2年前の前回総会からは、IAAF憲章の改定により、理事会が決定、総会には報告のみとなっている。

技術委員会は、「競技規則に関するすべての問題を取り扱う」とされ、委員長と17名の委員をもって構成されている。大陸別では、ヨーロッパが10名と過半数を占め、北中米カリブが3名、アジアが中国と日本の2名、オセアニア、アフリカ、南アメリカが各1名となっている。ロシアの委員は、同陸連が資格停止中であるため出席が認められなかった。

今回の委員会会議の主要議題である規則の改正のうち、加盟団体から提出された提案は、技術委員会が内容を検討し、採用に値するか(+)否か(-)の別を明示して理事会に提出する流れとなっている。技術委員会で(-)評価を受けた提案は、理事会では、議論の対象にもならないので、規則の改正においては、技術委員会内でいかに理解を得るかが重要となる。

今年は、日本が提出した1件を含む、加盟団体からの提案と委員会が継続して検討してきた規則修正等、あわせて66件についての取りまとめ、規則運用の解釈についての議論等をおこなった。今次、日本からの提案は1件のみだったが、本連盟競技運営委員会と施設用器具委員会で議論となっている内容については、私の委員就任以降、多数、提案や問い合わせという形で議題に入っており、今回の修正案にも日本の事情を考慮した内容が含まれている。

規則に関するといってもその内容は多岐に及ぶため、3つの分科会を設け、事前検討した結果を全体会議で審議するという会議の進め方をとっている。全体会議で委員の賛成を得た案件についてのみ、3月にドーハで開催されるカウンスル会議(理事会)に提案され、承認を待つことになる。3つの分科会は、「競技規則」、「施設用器具」、「テクノロジー」であり、私は施設用器具部会長に指名されている。

なお理事会で承認されたIAAF規則改正は、基本的に本年11月1日から有効であるが、数件に関しては緊急性があるとの理由で即時発効となる可能性がある。その場合、ともにドーハで開催される、4月のアジア選手権や9月の世界選手権で、新規則が適用されることになるので、3月の理事会での決定内容を注視する必要がある。また、国内で適用される日本陸連競技規則としては2020年4月1日から有効となるが、即時発効の規則の取り扱いについては検討が必要となる。

◆IAAF新体制と変革

4年前に就任したセバスチャン・コー会長のリーダーシップにより、3年前の12月にIAAF憲章が大幅に改定された。選挙により委員が選出されるIAAF委員会は2019年までの任期をもって廃止となり、以降、IAAF理事会推薦によるコミッションまたはワーキンググループとなることが決まっている。

コー会長就任にあたっての「陸上競技をより魅力的なものにする」という公約を受けて、委員会での議論では、「規則がどうあれば、陸上競技が魅力的なスポーツとなりうるのか」を念頭に置くよう求められている。会長による強い意向を受けて、競技のスピードアップや改革(新たな競技スタイルやシステム)が歓迎されるようになっ

た。また規則違反への考え方も「厳格」から「一定の配慮」に変化しているような印象がある。今後、選挙による選出でなく推薦されたメンバーによって競技規則が審議されることになると、この傾向は一層増すことになるかもしれない。

IAAFの創設以来、最も歴史のある委員会として100年以上にわたって活動してきた技術委員会の最後の会合ということで、会議の冒頭、コー会長隣席のもと、IAAF本部で長年、委員会担当をつとめてきたイムレ氏が委員会の歴史を振り返るプレゼンをおこない、過去の重要な規則改正にいかん委員会が関わってきたかの説明があった。また映画「炎のランナー」のハロルド・エイブラハムス氏(イギリス)や後にIOC会長となるアベリー・ブランデージ氏(アメリカ)も委員であったことも紹介された。

◆日本からの規則改正提案

第142条3-2種目以上に競技者が参加する際の扱いを定めた「同時申し込み」の規則では、同時に実施されている他の種目から、走高跳と棒高跳に戻って来る際、ラウンドが変わってしまっていたなら「パス」扱いとなる。しかし「パス」ではその高さの2ラウンド目、3ラウンド目に挑戦できなくなってしまうことから、日本国内適用では、事前に申告していた場合、「無効試技」扱いとなると定めている。

この点についてIAAF規則を国内適用と同様にするよう提案したが支持を得ることはできなかったものの、日本の方法も国内競技会レベルでは認められることが、規則の解説部分に記載されることとなった。

◆主要な競技規則改正提案

1. 第100条 - 世界選手権やオリンピックでも適用が可能となる。これまでは、世界選手権やオリンピック以外では、IAAF競技規則による方式以外での実施が可能だったが、今後、両大会でも、適用可能となる。ただし競技者に有利とならないことが大前提。
2. 第112条 - 技術代表(TD)に、より大きな権限を与える。競技規則にない事案を決定する権限は、これまで規則上、審判長にしかなかったが、TDが決定する権限を持つ。
3. 第125条5 - リレーでの不適切行為によるイエローカード、レッドカードの扱いを明記。リレーでは、メンバーの同一選手がイエローカード2枚で、または異なる選手が1枚ずつのイエローカードでも2枚の累積とみなし失格となる。しかし個人種目のカード累積とは扱われない。またそのチームが出場する他のリレー種目への累積ともならない。規則145条にも関連事項あり。
4. 第141条1 - 現行の年齢区分(U20、U18、マスターズ)の他にも、陸上競技統括組織(地域陸連や各国陸連)が独自の年齢区分を設定できる。ヨーロッパ陸連によるU23など。
5. 第144条4(g) - レースで競技者が倒れた時に、立ち上がることや救護に移動するのを競技役員ははじめ主催者が認めたスタッフが手助けすることは助力とはならないと明記。
6. 第144条4(i) - 長距離レースで好記録を出させる目的で、ライトで走者にペースを知らせるシステムの使用は助力とはみなさない。
7. 第163条14 - 競技区域内で途中時間を競技者に知らせる行為について一律に不許可とするのではなく、審判長の裁量に任せることとする。ダイヤモンドリーグなど国際招待競技会では、好記録を出させる目的で、インフィードからある特定の競技者だ

けに途中時間を知らせる行為が頻発していた。こうした行為は、審判長の判断で公式に認められることとなる。

8. 第168条6-7(b) - ハードルを越える際の違反行為として「故意に」倒すことが含まれていたが、審判長によって解釈が異なるという問題があった。誰でも同じ判断ができるように、「故意に」を削除するとともに、違反行為をより具体的に列記することとした。
9. 第169条5 - U18男子障害物の高さを400mハードルと同じ83.8cmに変更。
10. 第170条10 - リレーメンバーが走ることができるのは「1区間」だけという規則について、統括組織が変更できることとする。5月に横浜で開催される世界リレーで、2×2×400mが導入され、ひとりが2度400m走る必要が生じたことによる。4×400mで1人が2度走ることは想定していない。この規則は3月のIAAF理事会で承認されれば、5月に間に合わせるために即発効となる。
11. 第170条22 - リレーに関する規則第170条に記載のない種目を実施する場合、統括組織（国際陸連や各国陸連）が特別な規定を設定してよい。5月の世界リレーで実施される2×2×400mリレーやシャトルハードルリレーは、170条に規定がないことが追記の理由。3月のIAAF理事会で承認されれば、5月に間に合わせるために即発効となる。
12. 第180条6 - 長さの跳躍で、以前、数年の間、最後の6回目の試技順を記録順に変更するという規則があったが、煩雑さや競技を止めてしまうことによる競技者への不利益を理由に撤廃された。しかし中継テレビ局から根強い要望があることから、統括組織の判断で変更できることとした。
13. 第180条17 - フィールド種目の制限時間を2016-2017年度の規則に戻す。3月のIAAF理事会で承認されれば即発効となる。
14. 第185条1(a) - 長さの跳躍の無効試技の定義の変更。「踏切線の先の地面（粘土板を含む）に触れた時」、という規則を、「踏切線の垂直面から先に出た時」とする。この変更が承認された場合、粘土板は不要となり、ビデオシステムの使用が推奨される。
15. 第190条1 - 円盤投でハンマー投用囲いを使用する時、ハンマー投同様に可動式パネルを使用してよい。
16. 第193条8 - 700gのやりが先端から落下しない事例が多いことから重心を前に動かす。
17. 第200条1-5 - 混成競技で十種競技や七種競技を「連続する2日間」と定める表現を「two consecutive 24 hour periods（連続する2回の24時間単位）」に改める。本年9月のドーハ世界選手権では、混成競技は夕方開始され日が変わって各日の最終種目を終えることになっている。現在の規則の解釈では「3日間」にわたって競技が実施されることになってしまうため「2日間」の定義を明確にした。3月のIAAF理事会で承認されれば、9月に間に合わせるために即発効となる。
18. 第200条7 - 混成競技の最終種目で、スキー、ノルディック複合で採用されているグンダーセン方式を使用することを可能とする。最終種目前までのポイント差をタイムに換算し、最終種目では成績が良い順に時間差でスタートする方式。
19. 第211条 - 室内と屋外という概念を廃止。ショート（200m）トラックとロング（400m）トラック（仮称）といった名称に変更し、260条～264条に定める世界記録を一本化し、室内世界記録は廃止。
20. 第230条7(c) - 「ピットレーン」という名称を「ペナルティゾーン」に変更。3月の理事会で承認されれば即発効となる。

◆競技規則以外の案件

【施設用器具】

1. IAAFには競技場の認証制度があり、屋外競技場ではクラス1とクラス2の2種類、室内競技場には室内認証の1種類がある。このうちクラス2と室内の認証料が、2019年1月から2000ドルに値上げとなった。ただし日本国内ではすでにクラス2認証申請を予定している競技場が複数あることから、検定前であっても3月までに認証料を先払いしておけば1500ドルでよいこととなった。
第149条2により仮設される種目別競技施設にも手続きを経て1回限りの認証制度を導入予定である。1回限りの認証代は、500ドルの予定。
2. 日本では5年に1回、公認継続のための検定が義務付けられているが、IAAF認証は、これまで、舗装材の張り替えやオーバーレイ、ラインやマーキングの引き直しが必要で、有効期限はなく、認証は永続的に継続となっていた。
このため2016年の技術委員会会議での議決を経て、2019年1月1日からIAAF施設認証には5年間の有効期限が課せられることとなった。これまでの緩い条件による世界への普及の段階からQuality Control（質の確保）への方針転換である。すなわち、2019年1月1日現在、IAAF認証を保持している世界の1019競技場は、有効期限が2024年1月1日までとなった。これ以降、新規に認証を取得する競技場は認定日から5年間に有効期限となる。
なお、1度に限り、あと5年の更新が可能であり、更新料は新規の半額となる。ただし、「舗装材が5年以内に敷設された」という条件がついている。これはIAAFの調査により、敷設後、7～8年を経過した舗装材は、劣化や硬化が激しく、そのままの状態では、トラックの質を保持できないという考察による。すなわちIAAF認証後、10年を経過した競技場は、舗装材の張り替えもしくはオーバーレイを実施したうえで、改めて新規のIAAF認証を申請する必要があるということになる。
3. 投てき実施可能な人工芝は、日本の製造会社が初めて開発し、数年にわたり、IAAF技術委員会の席上で紹介し続けてきた。結果、改定版のIAAF施設マニュアルには、投てき可能な人工芝の使用を認める記述が加わることが決定している。世界選手権を含むIAAF主催競技会開催規定には、インフィールドにIAAFが承認した投てき可能な人工芝を敷設してよいという記述がすでに加えられている。
また、条件を満たした製品かどうかの判断の助けとするために投てき可能な人工芝が、IAAF認証リストに加わることも予定されているが、それに先んじて、日本陸連施設用器具委員会は投てき可能な人工芝を承認するための規程を施行した。今回の技術委員会会議では、この英語訳を提供した。結果、IAAFは、日本の基準を参考にすることが確認された。

【テクノロジー】

第143条2 - マラソンで話題となっているアメリカ製ランニングシューズと下肢切断競技者が使用するカーボンファイバー製義足の効用について、ドイツの大学の研究者がプレゼンをおこなった。アメリカ製のランニングシューズは、他社製に比べ、マラソンで好記録が出る傾向がある。義足については助走スピードが確保できれば走幅跳でかなりの好記録につながるなどの報告がなされた。委員会では、ランニングシューズについては、誰でも公平に入手できる製品であること、使用した全員が好記録を出せるわけでない、ことから規則違反とはみなさないと結論づけた。義足については、IAAFの見解「義足の使用により有利となっていないことを証明できなければ使用は認められない」に現状での変更はない。

2018年度日本陸上競技連盟U16ジュニアブロック研修合宿 報告

日本陸上競技連盟 普及育成委員会 東川安雄

日本陸上競技連盟主催のU16ジュニアブロック研修合宿が、年末年始にかけて全国9会場において、選手1739名、指導者412名の参加を得て行われた。この合宿は、中学校の陸上競技に携わる選手及び指導者が競技に対する知識と理解を深めながら種目に応じた技術指導の中、一層の競技力向上に寄与するとともに、集団生活を通して基礎的な生活習慣の確立と選手相互の友情を培うことを目的としたもので、2013年度から始まり今回で6年目となる。

中体連専門部の指導者の話を目を輝かせて真剣に聴き、精力的に挑戦し、仲間と確認しながら練習に取り組

んでいた選手達の姿が印象的だった。参加した選手達の今シーズン、さらには今後の活躍が期待される。

また、昨年本連盟が「競技者育成指針」を作成したことをふまえ、今回は各会場に普及育成委員会委員を派遣して競技者育成指針や鉄剤注射の根絶等の講義を行った。発育発達段階等をふまえた競技者育成の基本的な考えを指導者間で共有することができたと思われる。なお、参加した指導者の資格保有率は10%台と極めて低い現状が判明した。ステージ3（中学校期）にとって大きな課題である。

ブロック	北海道	東北	関東	北信越	東海	近畿	中国	四国	九州
参加都道府県	北海道	青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島	茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨	新潟・長野・富山・石川・福井	静岡・愛知・三重・岐阜	滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山	鳥取・島根・岡山・広島・山口	香川・徳島・愛媛・高知	福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄
日程	1/7~9 (月)~(水)	12/8~9 (土)~(日)	12/26~28 (水)~(金)	12/22~24 (土)~(月)	1/5~6 (土)~(日)	1/12~14 (土)~(月)	12/26~28 (水)~(金)	12/22~24 (土)~(月)	12/22~24 (土)~(月)
開催地	札幌	宮城	山梨	長野	愛知	和歌山	広島	高知	熊本
指導者講習会実施日	1/7(月)	12/8(土)	12/26(水)	12/23(日)	1/6(日)	1/12(土)	12/27(木)	12/23(日)	12/22(土)
陸連派遣講師	桜井智野風	小林敬和	繁田進	沼澤秀雄	東川安雄	東川安雄	東川安雄	繁田進	小林敬和
参加人数(選手)	49	259	400	202	160	252	105	117	195
参加人数(指導者)	21	59	97	52	46	59	20	30	28
参加者合計	70	318	497	254	206	311	125	147	223
有資格者数	4	7	11	9	8	4	0	3	4
有資格者の割合	19.0%	11.9%	11.3%	17.3%	17.4%	6.8%	0.0%	10.0%	14.3%

【北海道ブロック】

北海道ブロック研修合宿は、1/7~1/9に(きたえーる、つどいむ、セキスイハイムアリーナ)、(ホテルハシモト)を使用して開催した。参加者は選手49名、指導者21名であった。札幌市強化選手、道央陸協強化選手と合同で練習を行う場面も作り交流できた。

今年度もサブアリーナを使用し、コントロールテストや基本的な動き作りを中心とした内容を行った。場所が狭くスペースを有効活用するために各ブロックで調整し、工夫して練習ができた。各選手が学校に戻ってからも、継続できる練習内容であった。中長距離はつどいむやセキスイハイムアリーナに移動しペース走、インターバル走などで走りこむことができた。

今回は参加指導者が多く、選手一人一人に十分なアドバイスを与えることができた。(北海道：岸本正直)

【東北ブロック】

東北ブロック研修合宿は、12/8~12/9にひとめぼれスタジアム宮城を練習会場とし、6つの宿舎(ANAホリデイイン仙台、ホテルルートイン仙台東賀城、ホテルルートイン多賀城駅東、ホテルグリーンマーク、ホテルパールシティー仙台、バリューザ・ホテル古川三本木)

を使用して開催した。参加者は選手259名、指導者59名であった。今年度は福島県の旅行業者が主担当となり、一括して宿泊場所を斡旋した。

会場のひとめぼれスタジアム宮城はトラック、投てき場は勿論のこと、屋内練習場も充実しており、天候に左右されずに運営することができた。東北地方でこの時期心配される降雪や積雪もなく、好天に恵まれ、充実した練習を実施することができた。比較的積雪の少ない宮城県に会場を固定し、宮城県スタッフを中心に各県スタッフの協力の下、「東北は一枚岩」を合い言葉に開催できていることに感謝したい。(福島：二瓶励)

【関東ブロック】

関東ブロック研修合宿は、12/26~12/28に山梨県緑が丘陸上競技場をメイン会場に、3会場において実施された。1都7県より400名の未来ある中学生アスリートが集結し、1日目は富士山の麓、短距離日本代表合宿でも利用されている富士北麓競技場において霊峰富士を望みながら合宿がスタートした。

3日間とも大変寒い中ではあったが、各ブロック、選手・コーチとも大変熱心で寒さを吹き飛ばし元気よくトレーニングに励んだ。トレーニング終了後は、宿舎であ

る石和温泉で疲れを癒やし、各都県のミーティング等で充実した講義が行われていた。

「関東は一つ」「関東を制する者は全国を制す」を合い言葉に、選手同士またはコーチ同士が互いに切磋琢磨し合い、コミュニケーションをとりながら親交を深め、みんなで高みを目指す充実した3日間の合宿となった。

(山梨：河野直人)

【北信越ブロック】

昨年度より北信越単独での開催となったブロック合宿は、12/22～12/24に松本平広域公園陸上競技場を主会場に開催した。北信越5県より202名の選手と指導者52名が参加した。

今回の練習は全てブロック別に種目練習を実施した。ブロックの人数も多いところで30名ほどであり、少人数にすることで選手間はもとより選手と指導者のコミュニケーションが取れ、より中身の濃い練習となった。コーチは各県の指導経験豊富な先生方に務めていただいた。多くのコーチは昨年にも指導に当たって頂いた先生方で指導内容に継続性が出たこともありがたかった。大きく天候が崩れることもなく、充実した練習をすることができた選手たちは新潟北信越大会、大阪全中大会での再会を約束し、さらなる飛躍を胸に合宿を締めくくった。ご尽力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

(長野：宮澤真一)

【東海ブロック】

2日間天気にも恵まれ、ほぼ計画通りに練習を行うことができた。各県のトップ選手が集まることで、非常に活気のあるレベルの高い練習を行うことができたと感じる。さらに各県の指導者が指導方法や各県での取り組みなどを話し合う機会をもつことができ、指導者の指導力向上にもつながっていると感じた。特に若い指導者は、ベテランの指導者から多くのことを学ぶことができたと感じる。来年度以降も積極的な情報交換を通じて、選手強化につなげていきたい。来年度は、三重県で開催を予定している。

(愛知：佐橋弘晃)

【近畿ブロック】

今年度は、近畿各府県より指導者・選手総勢311名のエントリーがあった。時期的なこともあり、直前に数名が体調不良によりキャンセル、合宿開始後にも数名体調不良になり帰宅したが、大きなけがやトラブルもなく3日間を過ごした。

活動は、このチャンスを来年度の自分の競技に生かすべくと選手たちは積極的に取り組み、真剣さの中に活気もあり、非常に充実した合宿になった。また、コーチの先生方もそんな選手を目の前にし、熱く指導していただき、選手たちにたくさんのお返しを還元して下さった。さらに、各府県の引率の先生方も、こんな機会はないので、ここぞとばかりに交流を深め、今後の自分

たちの学校の選手の指導に当たろうとされている姿もたくさん見受けられた。

天候は初日が悪天候に見舞われたが、コーチの先生方の工夫もあり、しっかりと練習メニューが消化でき選手たちも、充実の2泊3日を過ごせたのではないかなと思う。

2泊3日の少ない時間の中での合宿だったが、選手はもちろんのこと、指導者にとっても本当に充実した時間になったのではないかなと思う。この合宿だけで来年の結果の全てが決まるわけではないが、そのきっかけを与えることができたのではないかなと思う。来年度の近畿ブロックの選手の全国・近畿、さらには各府県での大会での健闘の一助になってくれるものと感じている。

(大阪：松岡晃)

【中国ブロック】

中国ブロック研修合宿は、12/26～12/28に広島県のコカコーラウエスト広島スタジアム、ダイヤモンドホテルを使用して開催した。参加者は選手105名、指導者20名であった。今年度は短距離、障害、走幅跳の3ブロックで実施した。今回の合宿も、各種目の基礎となる“走り”をメインテーマとし、民内利昭先生を外部講師としてお招きして、1日目は“走の基本”を中心とする走練習、2日目以降は専門練習に取り組みました。生徒・指導者ともに有意義な学びの場となった。

選手たちはお互いにライバル意識を持ちながら、意欲的に練習や栄養指導の講義などに取り組めた。“勢いのある中国ブロック団”として、来シーズンも記録・勝負に挑んでいきます。

(岡山：長谷川仁則)

【四国ブロック】

四国ブロック研修合宿は、12/22～12/24に春野陸上競技場、オリエントホテル高知を使用して開催した。参加者は選手117名、指導者30名であった。

本年度が高知県開催2年目となった。香川県の協力も得ながら指導者を集め、四国四県で協力をし、各県の指導者と連携をとりながら研修合宿を進めた。選手の中には全国大会入賞者も参加しており、各ブロックとも大変よい刺激となった。「四国は一つ」を合言葉に選手はもちろんのこと指導者も指導についての交流を深めることができた。また今回は栄養指導に大塚製薬の協力を得て講義を行った。

(高知：橋本武)

【九州ブロック】

九州ブロック研修合宿は、12/22～12/24に昨年の全中会場となった「えがお健康スタジアム」を練習会場に、松屋別館、ホテル熊本テルサ、熊本ビジネスホテルを宿舎として開催した。参加者は選手195名、指導者28名、視察指導者13名でした。日本中体連の舟橋委員長も駆けつけていただき、質の高いハイレベルな指導を3日間、九州トップレベルの指導者の先生方にやっていただいた。

(熊本：沢田修)

第24回JAAFコーチング・クリニック報告

普及育成委員会 指導者育成部 沼澤秀雄

第24回JAAFコーチング・クリニックを2019年1月19日（土）に、味の素ナショナルトレーニングセンター（以下NTC）を会場にして開催した。コーチング・クリニックは、毎年全国の指導者に最新のコーチングに関する情報を提供することを目的としている。受講者はJAAF公認コーチ・ジュニアコーチ有資格者、中学・高校・大学・実業団の指導者と指導現場にはいないが講師の話が聞きたいと希望した一般参加者など総勢118名であった。講師は、2018年インターハイ女子100mHで日本高校記録を更新して優勝した小林歩未選手を指導した後藤彰英氏（船橋市立船橋高等学校陸上競技部顧問）、1992年バルセロナオリンピックで女子柔道日本代表選手として銀メダルを獲得した溝口紀子氏（日本女子体育大学教授）、男子800mで日本選手権6回優勝、2010年に日本記録を15年ぶりに更新し、日本人選手として44年ぶりにオリンピックに出場した横田真人氏であった。

午前のプログラムは、「ハードル選手の指導法について」であり、前半は講義形式で行い、後半はNTCの陸上トレーニング場で実技指導を実施した。講義では市立船橋高校のハードル指導の考え方と指導計画、そしてハードル技術のチェックポイントの説明があった。また、中学から高校への移行過程で残りやすい癖についての指摘があり、具体的な改善方法と最適な技術獲得のために養うべき指導者の目についての解説があった。そして、後藤氏が実践しているハードルの技術練習をドライブフェイズとリカバリーフェイズの図を示しながら説明いただいた。実技指導については、後藤氏が指導した小林歩未選手と森戸信陽選手（早稲田大学）にデモンストレーターとして参加いただき、幾つかのハードルドリルの紹介が行われた。人数の関係で受講者の指導は難しかったが、現役選手の動きを観ながらの指導は高度なハードル技術を獲得する過程を理解するのに十分なものであった。



午後のプログラムは、講義形式で行われた。テーマは「スポーツ指導者として、どこまでが指導で、どこからがハラスメントなのか」についてであった。講師の溝口氏は現役を引退した後、東京大学大学院で博士号を取得、静岡市の教育委員会委員長、柔道フランス代表チームのコーチに就任するなど、豊富な経験からジェンダーやハラスメントを論ずる社会学者でもある。今回は全日本柔道連盟が暴力・体罰・セクハラ問題を学ぶためのガイドブックを発行してハラスメントを本気で無くそうとしている取り組みについてお話しいただいた。その中でフランスは家庭内の暴力についても体罰は法律で禁止されているという説明があった。東京オリンピック・パラリンピックはスポーツだけではなく、ハラスメントを含む社会思想の転換期になるのではないかと溝口氏の示唆は考えさせられるものであった。国

際的に大きなスポーツイベントが間近に迫っている中で、暴力・体罰・ハラスメントについては日本のスポーツにとって重要な問題であり、陸上競技の指導者にとっても喫緊の課題であるの言うまでもない。受講者からの多くの質問にも具体例を挙げて答えていただき時期を得た内容となった。



最後に「800mのコーチングについて」というテーマで横田氏の講義があった。これまで中距離の指導者に向けたコーチング・クリニックは開催されておらず、指導者がいない中で独自の練習を実践して日本記録を樹立し、長年800mの第一人者として活躍した横田氏のトレーニング方法に注目が集まった。高校・大学・社会人とそれぞれの年代でどのようなトレーニングを行い、その結果400m、800m、1500mの記録がどのように変化したかについて、詳細なデータをもとに解説があった。また現在、コーチとして、どのような考えで選手に向き合っているかについてもお話しされた。自ら指導者を求めて渡米し、2人のコーチに指導を受けた時の経験から、その選手にあった指導者を見つけることが大切で、指導者を選択するためにも選手は自立していることが望ましいとの考えが紹介され、新谷仁美選手の指導についての考え方の説明があった。今回のコーチング・クリニックは横田氏の話が聞きたいと参加した受講者も多く、活発な質疑応答が行われ、これからの指導者のロールモデルになるのではないかと感じさせられた。



今回の内容は学校現場の指導者、民間スポーツクラブの指導者を問わず全ての指導者にとって参考になるものであったのではないかとと思われる。また、コーチング・クリニックは、日本スポーツ協会公認スポーツ指導者の義務研修としても位置付けられているので、特に公認コーチやジュニアコーチの資格を持っている指導者には積極的に参加していただきたい。

第25回JAAFコーチング・クリニック報告

普及育成委員会 指導者育成部 原 悦子

1. 日時 2019年2月10日(日)
2. 場所 広島修道大学(陸上競技場及び講義室)
3. 参加者 女性指導者 48名
4. 協賛 アシックスジャパン株式会社
5. 日程・内容

9:20	開講式	繁田進氏(日本陸上競技連盟 普及育成委員長) 河野裕二氏(広島陸上競技協会 専務理事)
9:50	実技講習	3種目(各45分ローテーション) 短距離: 吉田真希子氏(東邦銀行陸上競技部コーチ) オリンピック強化スタッフ(女子400mH)・ 女子4×400mR強化コーチ 棒高跳: 近藤高代氏(近江高等学校)・オリンピック強化スタッフ(女子跳躍) 投てき: 成瀬美代子氏(成瀬鍼灸治療院)U20オリンピック強化スタッフ(投てき)
12:35	写真撮影	『RIKUJO』について(広島陸上競技協会)
13:15	講習	『女性特性(女性アスリートの三主徴)に関して』 高尾美穂氏(女性のための総合ヘルスクリニック イク表参道 副院長 文部科学省・国立スポーツ科学センター女性アスリート育成・支援プロジェクトメンバー)
14:20	講習	『女子アスリートおよび女性指導者の育成・強化』 麻場一徳氏(日本陸連 強化委員長)
15:00	ワークショップ	『女性指導者活躍宣言』 進行: 児玉育美氏(JAAFメディアチーム) 山田貴子氏(広島陸上競技協会)
16:20	閉講式	岡山恵美子氏(広島修道大学陸上部コーチ) 秋元恵美氏(日本陸連 普及育成委員会 特別委員)

6. 報告

日本陸上競技連盟と広島陸上競技協会(以下、広島陸協)が主催する第25回JAAFコーチング・クリニックを2月10日、広島修道大学(広島市安佐南区)にて開催した。昨年に続き2回目の「女性指導者のためのコーチング・クリニック」として、女性指導者を対象としたプログラムを実施し、企画、運営面では広島陸協と共同で開催する形とした。主に中国、四国地区や九州方面から48名が受講し、天候にも恵まれ活気のある講習会となった。

繁田普及育成委員長、広島陸協・河野専務理事の挨拶による開講式の後、午前中に行われた実技講習は、吉田真希子氏、近藤高代氏、成瀬美代子氏が講師として、それぞれ、短距離、跳躍(棒高跳)、投てきを担当し、3種目を参加者が実技実践をしながら学ぶ形式で行った。各種目とも基礎的な内容を中心に、初心者から中上級者までの指導を行う上で必要な知識や指導法について実践を通して理解を深めた。様々な年齢層や経験の参加者が、スモールステップで段階を踏みながら、丁寧な解説と実演を間近に見ながらの実践を通して、終わりの頃には、全員が正しい動きができるようになり、非常に有意義な実技講習になった。

実技講習の後には、広島陸協から全員に『RIKUJO』バッジが配られた。『RIKUJO(陸女)』は陸上と女子を掛け合わせた造語で、女性が役割を持って活躍することで、陸上競技を始め様々なスポーツを益々発展させるという広島陸協の女性推進プロジェクトだそうだ。

午後は、はじめに、婦人科スポーツドクターの高尾美穂氏から、女性アスリートの三主徴(無月経・利用可能なエネルギー不足・骨粗鬆症)に関しての講習が行われた。三主徴はそれぞれ関連し合っていることや、アスリートの摂食障害や疲労骨折を防ぐ必要性について話をされた。その他にも、10代の骨を作る時期

での無月経(月経が3か月以上来ない、15歳になっても初経を迎えていない場合には産婦人科への受診が望ましい)については、その後非常に長い期間にわたり影響を及ぼす事がある等、男女を問わずすべての指導者と女性選手自身が理解しておく必要がある内容であった。

続いて、日本陸連が目指している方向性や競技者育成について麻場強化委員長より説明がされた。いまだにJOC加盟競技団体の役員9割以上が男性である事実が伝えられ、スポーツ界全体で女性の参画を促し、女性のロールモデルを増やす必要性が話された。また、東京オリンピックに向けて始動した女子リレー新プロジェクトについても説明があった。

そしてこの日最後の講習は、「女性指導者活躍宣言」をテーマとしたワークショップ。はじめに児玉育美氏の進行により、午前中の3名の実技講師から「指導者として活躍するために大事にしていること」が話され、吉田氏からは「リレーの新プロジェクトでは、現在何が足りないかを考えて、前に進んでいる。また、本日行ったドリルは、自分が納得するまでその1歩だけを90分くらい指導していただいたもので、それがわかってから記録が大幅に伸びた」、近藤氏からは「陸上でつくったネットワークを使って、自分の専門以外の種目では、他の指導者からも技術面を学びながら指導を行っている」、成瀬氏からは「6年間研修していたドイツでは指導の内容が各年代に合わせ共通で決まっており、女性、男性、種目に関係なく指導している」等が話された。三者三様の話に、参加者も興味深く耳を傾けていた。その後、広島陸協の山田貴子氏の進行により、「指導者としてやりたいこと、目指していること」を、参加者全員、グループワーク形式で話し合い、各グループ90秒の発表により、全体で内容を共有した。「指導者としてスキルアップする」「ストリート陸上などで陸上人口を増やす」「陸上教室の開催」「小中高、大学、実業団が連携する」「一人の選手をみんなでオープンに指導する」など前向きな意見が数多く出された。

閉講式では、広島県出身で1964年の東京オリンピックに走幅跳で出場し現在は広島修道大学のコーチに就任されている岡山恵美子氏から、「非常に実りある1日だった。実技講習会では特に基礎を丁寧に指導していただいていたが、自分も恩師から基礎を徹底して繰り返し教えていただきオリンピックに出場できた。これからの皆さんの活躍を祈念しています。」と参加者へのメッセージをいただいた。

次に今回のコーチング・クリニックの企画・運営を率いた秋元恵美氏(日本陸連普及育成委員会特別委員)から「日本陸連で進めている公認コーチ制度の女性の有資格者はまだまだ少ないのが現状。日本陸連では、陸上界がさらに発展していくためにも、女性指導者をもっと増やしたいに活躍していただけるようにしたいと考え、昨年度から公認コーチの参加に各県2名枠にプラスして女性1名枠を設けている。今は女性と男性というより、一人ひとりの個人の能力が問われてくる時代。そのために、まず、指導者が正しい知識を身に着け力をつけていくことが求められる。今回参加された皆さんにとって、充実した研修になれば、開催した意義もあり、能力に応じた機会も増えていくのではないだろうか」と挨拶し閉会した。

最後に、企画と運営面にわたり全面的な協力をいただいた広島陸上競技協会の皆様、会場である広島修道大学と補助員の学生の皆様、今後の女性指導者の活躍のためにご多忙の中、快く講師を引き受けていただいた方々にこの場をお借りして深く感謝いたします。(詳しい内容については後日、日本陸連のHPに掲載します。)



大会観戦ガイド

第103回日本陸上競技選手権大会50km競歩 兼ドーハ2019世界陸上競技選手権大会 男子50km競歩日本代表選手選考競技会 第58回全日本競歩輪島大会

50km競歩の日本選手権が迫りました！日本トップウオーカーたちが今秋にカタール・ドーハで開催される世界選手権の日本代表を懸けて争います。熱い競演にご期待ください！

▼種目・スタート時間：

4月13日（土）全日本競歩輪島大会	
女子高校1・2年 3km競歩	12時30分
男子高校1・2年 3km競歩	13時00分
男子全日本10km競歩	13時30分
男子ジュニア10km競歩	13時30分
女子全日本10km競歩	14時30分
女子ジュニア10km競歩	14時30分

4月14日（日）日本選手権	
50km競歩	7時30分
※女子 50km競歩（オープン）	7時30分

4月14日（日）全日本競歩輪島大会	
女子高校 5km競歩	11時30分
男子高校 5km競歩	12時10分

▼コース：道の駅輪島ふらっと訪夢前往復コース・日本陸連公認競歩コース（1周2kmの周回コース）



昨年度の大会の様子

▼アクセス（石川県輪島市文化会館付近）：

石川県輪島市文化会館は「道の駅輪島」ふらっと訪夢」前。

・能登空港からふるさとタクシーを利用。能登空港発着便に合わせて利用可能（要予約）。予約先 港タクシー TEL：0768-22-2360

・能登空港より特急バス約20分「輪島駅前ふらっと訪夢」下車

・「金沢」駅より特急バス約120分「輪島駅ふらっと訪夢」まで

▼問合せ：輪島市教育委員会生涯学習課スポーツ推進室
全日本競歩輪島大会実行委員会事務局
TEL：0768-23-1176

▼日本陸連WEB内大会ページ：

<http://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1338/>

第21回長野マラソン

1998年に開催された長野冬季オリンピックを記念して1999年より開催の長野マラソン。エムウェーブ、ホワイトリンク、ピックハットなどのオリンピックが開催された会場前を通るコースに、10,000人が集います。

▼日時：4月21日（日）8時30分スタート

▼コース：長野マラソン長距離競走路

（スタート） 長野市吉田・長野運動公園

（フィニッシュ）長野市篠ノ井東福寺・長野オリンピックスタジアム

▼アクセス：

・長野運動公園

しなの鉄道北しなの線「北長野」駅下車、徒歩約20分
長野電鉄「朝陽」駅下車、徒歩約15分

長野電鉄バス「運動公園」下車

・長野オリンピックスタジアム

JR篠ノ井線、しなの鉄道線「篠ノ井」駅東口より、徒歩約30分

長野駅・篠ノ井駅よりシャトルバス

▼問合せ：長野マラソン大会組織委員会事務局
TEL：026-234-6380

（受付時間：平日9：30～17：00）

▼日本陸連WEB内大会ページ：

<http://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1339/>

▼大会公式サイト

<https://www.naganomarathon.gr.jp/>



JAAF SHIGA

一般財団法人滋賀陸上競技協会

〒520-3251 湖南市朝国607 坂一郎房
TEL.0748-72-2056 FAX.077-527-3925
http://www.biwako.ne.jp/~srkshiga/

2巡目の滋賀国体（国民スポーツ大会）開催まであと5年となつてまいりました。この3年で彦根城の北側に公認陸上競技場を完成させなければなりません。来県していただく皆様方に、素晴らしい競技場になることを願っております。

さて、昨年「福井しあわせ元気国体」の成績は、天皇杯49点21位、皇后杯35点14位、成年男子400mに出場した河内光起選手（近畿大）は46秒43でみごと優勝を致し、近年にない結果を残してくれました。しかし、5年後に迫る国民スポーツ大会を見据えると、強化に対する課題もたくさんあります。選手の育成、成年の部の選手の獲得、指導者の適性配置、指導者の指導レベルの向上、等々……これらの課題を緊急に解決できるよう、頑張っていく所存であります。

また、5年計画の審判員の養成であります。新しい審判員の養成もまた、現有審判員の資質の向上と全国大会レベルの研修が必要であります。特に、主任クラスの資質・技術の向上は、各種全国大会での研修に他なりません。

本年は、協会にとりましては、茨の道を行く年となりそうです。30年度の予算に対しまして、全ての事業で10%シーリングをしなければなりません。5年後の国体を成功させるためには、本年度中に全ての見直しと全てを新しい元年として出発します。そのためには、皆様方の引き続きの熱いご支援ご協力を心よりお願い申し上げます。

（文責：会長 奥村展三）

JAAF OSAKA

一般財団法人大阪陸上競技協会

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-1 大阪市長居陸上競技場内
TEL.06-6697-8899 FAX.06-6697-8766
http://www.oaaa.jp/

2019年「OSAKA夢プログラム」始動!!

弊会主催の当プログラムも最終局面に入りました。平素から日本陸連を初め関係各位には本プログラムに絶大なご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。さて、今冬は新春の沖縄合宿に皮切りに米国、豪州遠征を実施しました。今シーズンは東京オリンピックに向けた重要な時期となるため、国内グランプリシリーズを始めとする各競技会を積極的に活用していきます。指定強化選手（多田修平（住友電工）：100m、丸山優真（日本大学）：混成競技、松田瑞生（ダイハツ陸上競技部）：10000m、マラソン、川田朱夏（東大阪大学）：400m、800m）の個々の課題を克服し更なるレベルアップを図っていく計画です。6月の日本陸上競技選手権大会を本プログラムにおける強化の総仕上げとして位置づけ、IAAFドーハ世界陸上競技選手権大会に照準を合わせ、事業を推進して行く方針です。IAAFが検討中のポイント制への対応を意識しつつ、積極的に海外を含む対象競技会に出ていく必要があります。よって海外遠征に積極的に取り組むことも本事業の重点課題となっております。IAAFの議論、ポイント制導入の環境整備を注視しつつ事業を進めてまいります。また、弊会主催の第6回本南記念陸上競技大会においても開催種目を増やすなど競技会の質の向上に取り組みしております。2020東京オリンピックに向け、弊会としても強化対策の一端を担うべく努力まい進しております。引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。結びに、当OSAKA夢プログラム事業にご支援ご協賛を賜っております関係各位に対し、本紙面をお借りして心から厚く御礼、感謝申し上げます。

JAAF KYOTO

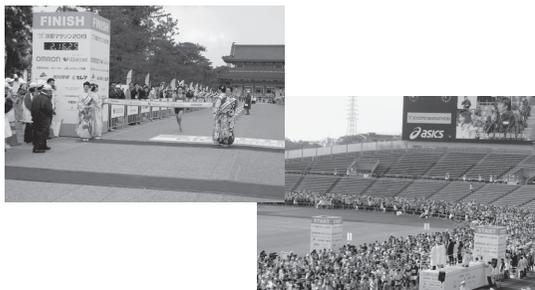
一般財団法人京都陸上競技協会

〒615-0872 京都市右京区西京極南衣手町57番2
TEL.075-322-5500 FAX.075-322-5501
http://www.krk26.jp/

2月17日（日）に「京都マラソン2019」を開催しました。澄み渡った青空の下、16,723名のランナーが午前9時に西京極陸上競技場をスタート。天候に恵まれたこともあり、94.6%のランナーがフィニッシュの平安神宮まで完走することができました。

男子は丸山竜也選手（千葉県 松戸市陸協）が2時間16分27秒の大会新記録を樹立し優勝。女子は篠崎理紗選手（埼玉県 不動岡クラブ）が2時間51分40秒で優勝しました。山中伸弥京都大学iPS細胞研究所長や西脇隆俊京都府知事も完走し、出場したランナーと喜びを分かち合っていました。

（文責：広報・情報処理部長 相模浩史）



JAAF HYOGO

一般財団法人兵庫陸上競技協会

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号
神戸市生涯学習支援センター内
TEL.078-231-1771 FAX.078-231-1772
http://www.haaa.jp/index2.html

第8回神戸マラソンが11月18日（日）に開催され天候に恵まれフルマラソン19709人が出走し、完走率95.9%になりました。また沿道応援人数も60万人と切れ目なく応援していただき選手も快適に走ることができました。また、今大会は国際陸上競技連盟が認定する世界の主要ロードレース格付けである「ブロンズラベル」を取得して初めての大会となり、海外8か国から12人のエントリーランナーを招聘し、その結果、女子は前回大会に引き続き、大会記録が更新され、競技性・国際性が向上した大会となりました。

男子第73回・女子第34回兵庫県都市区対抗駅伝競走大会が2月3日加古川河川敷コースで開催されました。有力選手が全国各地から「ふるさと選手」として、各都市区に帰り白熱した大会となりました。

第102回日本陸上競技選手権大会男女20km競歩大会が六甲アイランド甲南大学周辺公認コースで2月17日開催されました。大会では、昨年に続き、高橋英輝（富士通）・岡田久美子（ビックカメラ）両者ともに5連覇し、ドーハ世界陸上競技選手権大会に内定しました。また、ロード競技初のビットレーンを採用し盛り上がった大会になりました。

第67回兵庫リレーカーニバル（グランプリ プレミアム）4月21日に開催されます。この大会は、大会カテゴリーを高めるためにアジアパシフィックとして、アジア45か国に招待状を発送し参加者を募ります。選手の高いパフォーマンスが今から楽しみです。

事務局からのお知らせ

◆◆「IAAF 世界リレー2019 横浜大会」大会公式WEBサイト◆◆

<https://iaafworldrelays.com/yokohama2019/>

IAAF World Relays YOKOHAMA 2019™

セカイリレーヨコハマ

2019年5月11（土）、12日（日）の両日に横浜市（横浜国際総合競技場）で日本初開催となるIAAF世界リレー2019 横浜大会。大会公式WEBサイトがオープンしました。今後様々な大会関連情報を掲載いたしますのでご覧ください。

【公式SNS開設】

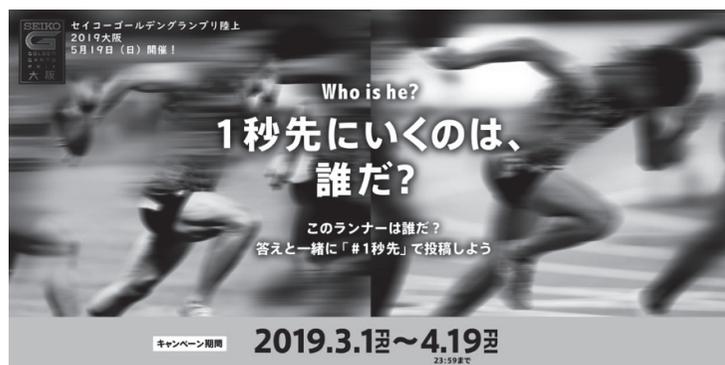
Twitter @IAAFYokohama19
Instagram <https://www.instagram.com/IAAFYokohama19>
Facebook <https://www.facebook.com/IAAFYokohama19/>

◆◆セイコーゴールデンランプリ陸上2019大阪「1秒先にいくのは、誰だ？」キャンペーン！◆◆

日本陸連では、大会の観戦チケットなどが当たるリツイートキャンペーンを実施します。

キーワード「#1秒先」とキャンペーン画像の選手名をつけて、キャンペーンツイートをリツイートしてください。

詳細はこちら▶<http://www.jaaf.or.jp/news/article/12407/?category=5>



陸連時報編集委員

◇編集委員

横川 浩（陸連会長）
友永 義治（陸連副会長）
八木 雅夫（陸連副会長）
尾縣 貢（陸連専務理事）
麻場 一徳（陸連強化委員長）
風間 明（陸連事務局長）
高橋 克実（陸上競技マガジン編集長）

◇時報編集室責任者

大嶋 康弘
◇時報編集担当
繁田 進
石塚 浩
青木 和浩
宮田 宏
廣瀬 静香

陸連時報編集室

〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
WEBサイト <http://www.jaaf.or.jp/>
公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>